

地域運営組織の持続的な活動に関する評価 —組織の活動記録と構成員の認識に着目して—

公共システム研究室 松梨一揮

1. はじめに

人口減少や高齢化に伴い、住民自らが主体的に地域の課題を解決する必要性が高まっている。課題を解決するための主体として、近年、地域運営組織の設置が進んでいるが、持続的な活動を行うための運営方法に懸念がある組織も存在する。本研究では、大山町の地域運営組織を対象として、組織の活動を評価する。具体的には、組織の活動記録と構成員の発言録を用いてテキスト解析を行い、その結果を地域住民のアンケート調査と比較することで、組織の外部と内部から、これまでの組織の活動を評価する。

2. 分析の概要

組織の活動を評価するにあたり、住民と組織の構成員をそれぞれ、組織の「外部環境」と「内部環境」と位置づけ、住民、組織、構成員の3つの主体間の関係を明らかにする。住民の関心、組織の活動内容、委員の関心の類似度を算出し、組織の外部と内部の関係を評価する。外部のみならず、内部との関係を検証することにより、複数の観点から活動の評価を行う。

(A) 住民を対象としたアンケート、(B) 組織の定例会議における議事録、(C) 組織の委員への個別のヒアリングからデータを収集する。(A)では住民の生活に対する満足度を算出し、(B)では議事録のテキスト解析、(C)ではヒアリングの発言内容のテキスト解析を行い、これらの間での類似度を算出し、各主体の認識の違いを明らかにする。

3. 分析手法

まず、(A) アンケートにおいて住民が5段階で評価した生活満足度を項目 $i(i=1,2,\dots,8)$ ごとに集計し、各項目の相対満足度を算出する。組織が提供するサービスの利用の有無に従い住民を分け、それぞれの相対満足度に対しクラスター分析を適用し、4つのグループに分類する。次いで、(B) 議事録の文章と(C) ヒアリングの発言内容についてテキスト解析を行う。テキスト解析ソフトを用い、文書を生活満足度の項目 i に従って分類し、8つの項目に振り分けられた文書数の合計に対する項目 i の文書数の割合を算出する。項目 i 、グループ g の相対満足度 r_{ig} 、議事録における年度 k の文書数の割合 p_{ik} 、ヒアリングにおける発言者 h の発言数の割合 q_{ih} のユークリッド距離 l を算出し、それぞれの類似性を明らかにする。A

から算出した r_{ig} と B から算出した p_{ik} のユークリッド距離 l_{AB} は、(1)式のように定式化される。

$$l_{AB} = \sqrt{\sum_{i=1}^8 (r_{ig} - p_{ik})^2} \quad (1)$$

同様に、 l_{AC} 、 l_{BC} を算出する。 l_{AB} が大きい場合、住民の関心と組織の活動内容は乖離していると評価する。

4. 分析結果

図1に、相対満足度 r_{ig} と議事録の文書数の割合 p_{ik} の距離 l_{AB} の結果を示す。また、図2に議事録の文書数の割合 p_{ik} とヒアリングの発言数の割合 q_{ih} の距離 l_{BC} の結果を示す。組織の設立時(平成24年)から年を経るに伴い、組織の活動内容が住民の関心に近づいていることが明らかとなった。それに対し、組織の活動内容と各委員の関心は年を経るに伴い、遠くなっていることが明らかとなった。

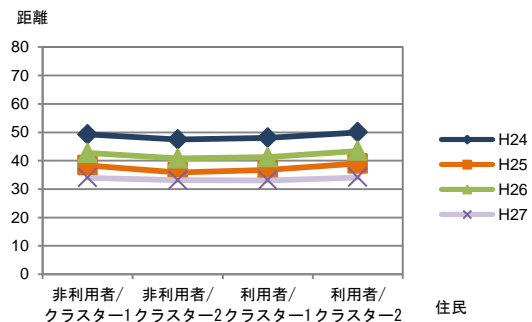


図1 相対満足度 r_{ig} と議事録の文書数の割合 p_{ik} の距離 (H24~H27)

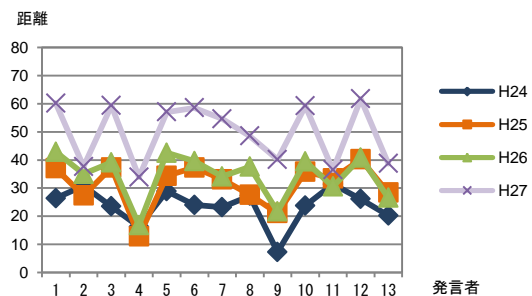


図2 議事録の文書数の割合 p_{ik} とヒアリングの発言数の割合 q_{ih} の距離 (H24~H27)